

sweave

宮崎

2014 年 1 月 12 日

Campbell and Mankiw [1990], 吉良 and 太郎 [2010] を参考にする.

はじめに, 乱数を発生させ, 回帰を実施する.

結果を実行すると以下のとおりである.

```
> result <- lm(y~x)
```

結果を表1にまとめられる. 回帰係数は 2.492 である. 結果は図1にまとめられる

## 参考文献

John Y. Campbell and N. Gregory Mankiw. Consumption, income, and interest rates: Reinterpreting the time series evidence. NBER Working Paper 2924, National Bureau of Economic Research, Inc, 1990.

URL <http://ideas.repec.org/p/nbr/nberwo/2924.html>.

坂井吉良 and 瀧本太郎. 消費のランダム・ウォーク仮説と恒常所得仮説の検証について. 政経研究, 47(1): 352–332, June 2010. ISSN 02874903. URL <http://ci.nii.ac.jp/naid/40017230972>.

表1 回帰結果表

	Estimate	Std. Error	t value	Pr(> t )
(Intercept)	9.850	0.197	49.947	0.000
x	2.492	0.332	7.495	0.000

図1 回帰結果図

### 関係図

